

医心 伝心

世代間ギャップと コミュニケーションについて思うこと

富山県医師会常任理事 鳴河 宗聰

私たちは自分の親世代から「次世代」と言われて歩んできましたが、気づくと次の次の、そのまた次の世代の目覚ましい活躍を目の当たりにします。夏や冬のオリンピックでは10代、20代の活躍が目覚ましく、「最近の若い人は物おじしなくてすごいね」という声が多く聞かれます。そのような若者世代の流行や文化が理解できず、「もうついていけない」と半ばあきらめモードで無関心になります。そして、多くの人が年齢とともに新しいものや変化への受け入れが難しくなり、若いときの価値観、感覚がそのまま固定されてしまいます。この「世代間の価値観の違い」から「最近の若者は…」が生じます。自分たちも言われてきたはずですが、気づくと同じようなことを口にしています。この「最近の若者は」という批判は、古代エジプトや古代ギリシャなどの古代文明の時代からあったそうで、時代を超えた共通のことと驚いたと同時に、しっかりと未来に進んできたことに安心しています。

そんなある日、本屋でふと一冊の本が目に留まりました。『先生、どうか皆の前でほめないで下さい いい子症候群の若者たち』という書名です。著者の言う「いい子症候群」とは、素直でまじめない子が有する目立ちたくない、均等分配が理想、自分では決められない、周りから浮かないかすごく気になる、などの行動原則です。その根底には自己肯定感の低さ、他者の視線への恐怖心があります。そして「これを生み出したのは大人だ。挑戦が成長につながることを実感できていないし、既得権信者も大人である。それが若者たちに空気感染するのだ。だから、まず変わらなければならぬのは大人たちである」と著者は述べています。

変わらなければと自分を省みていたところ、朝のニュース番組で「ギャル式ブレスト」という取り組みをみました。令和時代の選りすぐりの「ギャル」が、大企業の会議に参加して、新しい視点からブレインストーミングをするギャル会社の試みでした。たしかに、同じような環境にいる集団だけで新しい意見を出し合ったつもりでも、大して変わりがみられません。それに対し、一見突拍子もない（ぶつ飛んだ?!）意見が、停滞している会議に風穴をあけ活性化していました。大企業の社長がタメ口・あだ名で呼ばれ、みんな笑顔で大いに盛り上がっていました。「ギャルパワー恐るべし！」です。

若者は柔軟かつハイスピードで新しいカルチャーを取り入れていきます。「流行の発信地」と呼ばれる渋谷や原宿が「若者の街」でもあると考えると理解できます。そして「おばあちゃんの原宿」と呼ばれている巣鴨の「とげぬき地蔵商店街」は、とても過ごしやすそうな人気の場所ですが、いまだ「流行の発信地」とはなっていません。山本五十六のように、若者たちの可能性を見いだしてあげることが大人の役割だとずっと信じてきましたが、どうやら可能性を見出してもらうのは大人側なのかもしれません。あえて大げさに言うのなら、日本の将来も若者こそが大きな鍵を握っています。

若者世代から見ると上世代は「化石」、逆に上世代から見ると若者世代は「宇宙人」です。そのような化石と宇宙人が交わる「未知との遭遇」こそが、明るい社会をつくる鍵だと信じています。若者文化を学ぶ機会があればうれしいですね。みなさんはいかがでしょうか。